

『徒然草』の研究

——『白氏文集』受容考(一)——

金 文峰

はじめに

『徒然草』^{〔注1〕}第十三段には次のような記述がある。

ひとり灯の下にて文をひろげて、見ぬ世の人を友とする、こよなう慰むわざなり。文は、文選のあはれなる巻々、白氏の文集、老子の言葉、南華の篇。此国の博士どもの書ける物も、いにしへのはあはれなること多かり。

ここで兼好は「文」の代表として『文選』『白氏文集』(以下本論文においては『文集』とする)『老子』『莊子』の四つの書物を挙げていける。本論文では、この四書の中の『文集』に注目し、『徒然草』における『文集』受容の様相を具体的に考察してみたい。

『徒然草』の『文集』受容については先学のさまざまな論があるが、具体的な検討を試みた近年の論文としては、古沢未知男「漢籍引用より見た徒然草の一考察」^{〔注2〕}、戸谷三都江「『徒然草』の方法——『白氏文集』受容における——」、久保田淳「出典・源泉・先蹤」^{〔注3〕}、川口久雄

「徒然草の源泉——漢籍」^{〔注4〕}等が代表的なものである。

古沢未知男氏は、先の論文において、『徒然草』における漢籍全般の引用状況を調査し、兼好が愛読書の中に挙げなかった『論語』をはじめとする儒家グループの書物の引用が圧倒的に多く、『文選』『文集』グループがこれに次ぎ、老莊グループの引用が意外に少ないことは、『徒然草』の矛盾性、両面性、教訓性に繋がるものだと説かれている。戸谷三都江氏は『徒然草』の幾つかの段を取り上げ、これらの段における『文集』受容の方法を詳細に分析されている。久保田淳氏は、『徒然草』に引用されている『文集』の詩句の多くは『和漢朗詠集』に採られ、また『千載佳句』に採られている例もあり、直接『文集』を出典としているのか、それとも『朗詠』その他に拠ったのかは決め難いが、兼好の教養を考えれば、直接『文集』から出た言葉が多いのではないかと考察されている。川口久雄氏は、兼好の人間形成と漢籍とのかわりをめぐって、幾つかの段を取り上げ、これらの段の白詩引用はせいぜい凶宅とか秦中吟とか新楽府どまりであり、しかも

白詩の特徴の一つである社会への批判や諷諭の精神が『徒然草』の記事の中にはあまり反映されていない、故に兼好が『文集』を直接読んでというより、『和漢朗詠集』等によって人口に膾炙している詩句を撰取した疑いが強いと論じられている。

本論文においては、これらの先学の研究を踏まえながら、『徒然草』に引かれている『文集』が『徒然草』以前の日本の古典文学にはどのように受容されているかについて調べ、ここから『徒然草』における『文集』受容の特徴について考察してみたいと思う。

一

まず、近世から現代に至るまでの『徒然草』に関する主要な注釈書の記事を手がかりとして、これらの諸注釈書において指摘されている『文集』の詩句を典拠とする表現を挙げ、またそれらの『文集』の詩句が先行する日本の古典文学においてどのように受容されているかということを調べて一覧表を作成した。表の『千載佳句』から『文集百首』までの各欄については、『文集』の詩句と同一の詩句が典拠として踏まえられていると考えられる場合は○、同一の白詩の別の詩句が受容されている場合は△を記入している。最下段の「その他」は、上の四つの書物以外で、白詩の詩句と同一の詩句が受容されている場合に限って書名を挙げた。なお、『平家物語』諸本と『徒然草』の成立の前後関係については不明な部分が多いが、参考までに覚一本『平家

『物語』に受容例が見られる場合に限って挙げた。

徒然草	白氏文集	先行日本古典文学
段	本文	本文
七	ゆうべの日に子孫を愛して a世の人の心迷はずこ b外の色ならねば、さ もあらむかし C衣装に薫物す a物のあはれは秋こそ まされ	夕陽愛子孫 假色迷人猶若是、 異色迷人應過此 同上 為君薫衣裳
八	同上	大抵四時心慙苦 就中腸断是秋大
一九	b若葉の梢涼しげに まされ	新葉陰涼多
三〇	いづれの世の人と、名をだに知らず、年々／＼の春の草のみぞ	古幕何代人、不知 姓與名。化作路傍 上、年年春草生。
三八	a身の後には金をして 北斗を支ふとも b埋もれぬ名を長き世 に残さん(1)	身後埋金柱北斗 埋骨不埋名
四一	人、木石にあらねば	人非木石皆有情
四二	庭に散しはれたる花 見過ぐしがたきを	道見人家花便入
五四	aありつる若の庭に並 みあて	不壞紅葉青苔地
一〇五	bあはれ紅葉を焚かむ 人もがな	林間塚酒燒紅葉
一三七	北の屋陰に消え残りたる雪の	子城陰處猶殘雪
一四二	望月のまなきを千里 のはかまで眺めたる	三五夜中新月色、 千里外故人心
一七二	するすみ	匹如身後有何事
二〇七	百年の身を認まりて	櫻葉百年身

一七四	道を樂しむより氣味深 きはなし	卷三・老來生計 328	入間栄輝因縁淺、 林下幽閑氣味深	○	○	○
一七八	ことになすことなくし て身は老ぬ	卷七・醉吟一首 1064	事無成身老也	○	○	○
二二六	七德舞	卷三・七德舞・0125	慶鳴松桂枝、 狐藏	○	○	○
二三五	狐、衆やうの物も	卷一・凶宅詩・004 蘭菊藏	○	○	○	○

右の表について少し説明を加えたい。

第十九段のb「若葉の梢涼しげに」が、『文集』卷六十六「池上逐涼二首」の「緑樹陰前逐晚涼」に拠るといふ指摘は『野槌』^(注)でなされたものであるが、『徒然草全注釈』^(注)では卷九「青龍寺早夏」の「新葉陰涼多」を典拠としている。十九段の記事は、「灌仏の比、祭の頃」と本文にあることから陰曆四月中旬の情景を描いたと理解されるが、白詩の「青龍寺早夏」も初夏の頃を詠じている。これに對して、「池上逐涼二首」の詩では「残暑」の季節が詠まれている。したがって、十九段のbの部分については、白詩の「青龍寺早夏」の「新葉陰涼多」に拠っているとすると全注釈の指摘のほうがより妥当ではないかと思われる。また、第二百二十六段の「七德舞」は確かに『文集』の詩題ではあるが、『徒然草』の記事は「七德舞」の語が一致するだけで、詩の内容には立ち入っていない。他の段における『文集』の受容とはやや異なる事例ではあるが、一応掲出した。

二

前表に記した『徒然草』の各段の記述はいずれも『文集』の詩句と

の近似を否定し難く、その直接の典拠を『文集』に求めることはごく自然な推論かと思われる。しかしながら、『徒然草』に引かれている『文集』の詩句の中には、『徒然草』以前の日本の古典文学、とりわけ和歌や物語などに受容されているものも少なくない。兼好の漢籍についての教養を考えるならば、『文集』そのものを典拠とする可能性も否定し切れないが、その一方で、先行する日本の古典文学を媒介としての受容である可能性についても十分に考慮されるべきであろう。表を手がかりに、『徒然草』の『文集』受容と先行古典における『文集』の受容例とのかかわりについて整理してみたい。

1 『徒然草』が引く『文集』の詩句が『源氏物語』にも受容されている事例

第八段は、人間が色欲の誘惑に弱いことを久米の仙人の説話を取り上げて述べている段である。

世の人の心迷はずこと、色欲にはしかず。人の心は愚かなる物かな。句ひなどは仮の物ぞかし。しばらく衣装に薰物すと知りながら、えならぬ句にはかならず心ときめきする物なり。久米の仙人の、物洗ふ女の脛の白きを見て通を失ひけんは、まことに手足、はだへなどの清らに、肥えあぶらづきたらんは、外の色ならねば、さもあらむかし。

傍線を付した「世の人の心迷はずこと、色欲にはしかず」の部分については、『寿命院抄』が『文集』卷四「古塚狐」の「假色迷人猶若

是、真色迷人応過此」を典拠として指摘するのを筆頭に、『野槌』『慰草』『文段抄』もその白詩の詩句を引いている。これに對して、『徒然草解釈大成』や新日本古典文学大系『方丈記・徒然草』では「外の色ならねば、さもあらむかし」の部分の典拠として右の白詩の詩句を挙げてゐる。「しばらく衣装に薰物す」の部分の典拠については、諸注一致して卷三「太行路」の「為君薰衣裳」に拠っていると指摘している。ここでは、『源氏物語』に同一の詩句の受容が見出される前者だけをとり上げる。

「古塚狐」は新樂府第四首目に見えるもので、白樂天自注に「戒艷色也」とあるごとく色欲に対する戒めを主題とする。その中に次のような一節がある。

忽然一笑千萬態、見者十人八九迷。

忽然一笑千萬の態、見る者十人に八九は迷ふ。

假色迷人猶若是、真色迷人応過此。

假色の人を迷はすこと猶是の若し、真色の人を迷はすは應に此に過ぐべし。

彼真此假俱迷人、人心惡假貴重真。

彼の真と此の假と俱に人を迷はす、人心假を惡んで真を貴重す。

狐假女妖害猶淺、一朝一夕迷人眼。

狐の女妖を假るは害猶淺く、一朝一夕人眼を迷わすのみ。

古い塚の狐が美しい婦人を装って化けて人々を欺こうとし、これを見る人十人の中で八九人は迷つてしまふ。狐の化けた仮の美人でさえ人を迷わせるのだから、本物の美人に人が迷わされることはこれ以上であらうという内容である。

『源氏物語』手習卷には右に傍線を付した『文集』の詩句を典拠とすると見られる箇所がある。

身にもし疵などやあらんとて見れど、ここはと見ゆるところなく
うつくしければ、あさましくかなしく、まことに、人の心まどは
さむとて出で來たる仮の物にやと疑ふ。

横川の僧都が宇治院の裏手で、変化のものではないかと疑われる姿で倒れている浮舟を発見し、これを助ける場面であるが、僧たちは浮舟の姿を見て、これは人の心をたぶらかそうとして立ち現われた変化のものではなからうかと疑う。この記事に関して『源氏物語』の注釈書の中では早く『紫明抄』『河海抄』が「古塚狐」の「假色迷人猶若是、真色迷人応過此」を引き、『岷江入楚』『湖月抄』もその説を受け継いでいる。「人の心まどはさむ」と「仮の物」という記述から考えても、このあたりの記述が「古塚狐」を典拠とする可能性は小さくないであろう。

この段につづく第九段は女の髪の魅力を中心に色欲に対する戒めを語っている。先にも述べたが、「古塚狐」は艷色の戒めを主題とする詩である。兼好はその修辞や表現の次元のみに對して「古塚狐」の詩句を『徒然草』に取り入れたのではなく、詩の主題や内容にも共鳴す

るところがあったと考えてよいであろう。そして、第八段、第九段の執筆に際しては「古塚狐」の詩句を典拠の一つとして利用しつつも、それが『源氏物語』の世界に受容されることについても十分承知していたと理解してよいのではなからうか。

第四十一段は兼好が賀茂の競馬を見物しに出かけた折のことを記している。段末の「人、木石にあらねば、時にとりて物を感じることにあらず」の傍線部分の典拠として、諸注は一致して『文集』巻四「李夫人」の「人非木石皆有情、不如不遇傾城色」を挙げている。

「人非木石」に拠ったと思われる表現は『伊勢物語』や『源氏物語』の文章にも見られるものである。

(ア) むかし、男ありけり。女をとかくいふこと月日経にけり。岩木にしあらねば、心苦しとや思ひけむ、やうやうあはれと思ひけり。^{注12}
(『伊勢物語』第九十六段)

(イ) 見もてゆくままに、あはれなる御心さまを、岩木ならねば思ほし知る。
(『源氏物語』東屋)

(ウ) さまざまに思ひ乱れて、「人木石にあらざればみな情あり」、うち誦じて臥したまへり。
(『源氏物語』蜻蛉)

『伊勢物語』の「岩木にしあらねば」について、福井貞助氏は新編日本古典文学全集の頭注において、『勢語臆断』で指摘されている『遊仙窟』や『文集』の「李夫人」の一節を引いた上で、「これらから「岩木」の語が用いられるようになったのだらう」と注されている。

『源氏物語』東屋巻の「岩木ならねば」については、近藤春雄氏が

「人木石にあらざれば」は訓読のままで、「岩木ならねば」はこれを和文化したものだ^{注13}と説かれている。兼好は当然『伊勢物語』や『源氏物語』の右の記事を知っていたと考えてよいであろう。「李夫人」は新楽府の中の一編でもあり、その境遇の類似もあって、中国古代の美人として楊貴妃と並ぶ著名な存在である。漢詩文においてもしばしば並び称されるのであって、『和漢朗詠集』^{注14}にも「楊貴妃帰唐帝思、李夫人去漢皇情」（十五夜付月、二五〇、源順）という詩句が見えている。これらの享受の例から考えても平安時代における「李夫人」の知名度は『文集』の諸編の中でもひときわ高かったと思われる。兼好はおそらくこれらの先行古典文学の記事をも念頭におきつつ、その源泉となった『文集』の詩句に拠ってこの第四十一段の末尾の一節を書きつけたと想像されるのである。

第五段は、寒夜「人離れなる御堂の廊」の「長押に尻掛けて、物語りする」男女の姿を垣間見たことを記した段である。冒頭の「北の屋陰に消え残りたる雪」について、稲田利徳氏は「徒然草」の虚構性^{注15}と題する論文において、『文段抄』の「朗詠に、窓梅北面雪封寒。といへる佛なるべし」という記事を引いた上で、「この詩を指摘するくらいなら、私は『文集』（巻六十六、庾楼眺望）の詩句『子城陰處猶殘雪』（子城は北方の意）を想起していたとみたい」と述べられている。稲田氏はさらに『源氏物語』の若菜上巻の記事を挙げ、「この詩句は紫の上と別れる源氏が口ずさんでおり、人口に膾炙された詩句であると説かれている。三木紀人氏は講談社学術文庫『徒然

草全訳注¹⁶』で稲田氏の説に賛意を示し、さらに「若菜の巻の場面が女三の宮の降嫁にもとづく源氏と紫の上との微妙な心情のねじれを描く一節で、引用される詩句が源氏の心境の象徴となっていることからすれば、この段の男女の語らいの情景設定における「北の屋かげに……」はより深い意味を持っているかもしれない」と述べられている。稲田氏が指摘される『源氏物語』若菜上巻の記事は次のような場面である。

雪は所どころ消え残りたるが、いと白き庭の、ふとけぢめ見えわかれぬほどなるに、「猶残れる雪」と忍びやかに口ずさびたまひつ……。

傍線を付した「猶残れる雪」については、早く『河海抄』『細流抄』『岷江入楚』『湖月抄』などで「庾楼眺望」とのかかわりが指摘されている。新編日本古典文学全集『源氏物語』が当該箇所注することく、白詩のこの詩句は「平安人の間にはよく知られていた」と考えられるのであるが、兼好は右の若菜上巻の記事を念頭におきつつ、その背後にある白詩をも踏まえて「北の屋陰に消え残りたる雪」を背景とする男女の風雅な語り合いを描き出したと想像されるのである。

第二百三十五段は、心の実体や本質について語っている段である。

「狐、梟やうの物も、人氣に塞かれねば、所得がほに入り住み、木霊などいふけしからぬ形も顯る、物也」の傍線部分が『文集』巻二「凶宅」の「梟鳴松桂枝、狐藏蘭菊叢」に拠ると『野槌』『慰草』『文段抄』で指摘され、『徒然草諸注集成』¹⁷、新編日本古典文学全集、『徒然

草全訳注』、また戸谷氏の前掲論文などに踏襲されている。「凶宅」は『文集』巻頭の第四首目に置かれている。その一部を次に掲げる。

長安多宅、列在街西東。長安に大宅多し、列って街の西東

に在り。

往往朱門内、房廊相對空。

往往朱門の内、房廊相對して空し。

梟鳴松桂枝、狐藏蘭菊叢。

梟は松桂の枝に鳴き、狐は蘭菊の叢に藏る。

蒼苔黄葉地、日暮多旋風。

蒼苔黄葉の地、日暮れて旋風多し。

長安の人々に不吉の家として忌まれる荒廃した大邸宅を例として、不吉が生じるのはその家に住む人に拠るものであって、家自体が不吉なものではないと説き、さらに家も国も、その凶因のつまる場所は人凶であると述べ、人々の迷愚を悟らしめようとした諷諭詩である。この段の『白氏文集』受容について、戸谷三都江氏は『源氏物語』との関係から論じられている。『寿命院抄』以来『源氏物語』蓬生巻の末摘花の屋敷の描写との類似が指摘されている。

もとより荒れたりし宮の内、いとど狐の住み処になりて、うとましうけ遠き木立に、梟の声を朝夕に耳馴らしつつ、人げにこそさやうのものもせかれて影隠しけれ、木霊など、けしからぬ物ども所を得てやうやう形をあらはし、ものわびしきことのみ数知らぬに……。

（『源氏物語』蓬生巻）

傍線を付した部分の典拠については、『河海抄』が『文集』『凶宅』詩の「梟鳴松桂枝、狐藏蘭菊叢」を指摘して以来、『細流抄』『岷江入楚』『湖月抄』等の注釈書がその説を受け継いでいる。『源氏物語』蓬生巻のこの一節には明らかに「凶宅」詩の投影が認められると言つてよいが、また全体として『徒然草』第二百三十五段との間に強い親近感があることも否定できない。荒廃した場所が狐、梟の住処とされるという記事は『源氏物語』夕顔巻にも見られるものである。

「こはなぞ、あなものの狂ほしのもの怖ぢや。荒れたる所は、狐などやうのもののおびやかさんとて、け恐ろしう思はするならん。(中略)夜半も過ぎにけんかし、風のやや荒々しう吹きたるは。まして松の響き木深く聞こえて、気色ある鳥のから声に鳴きたるも、梟はこれにやとおぼゆ。」(『源氏物語』夕顔巻)

傍線を付した部分の典拠として、『河海抄』『岷江入楚』『湖月抄』はいずれも「凶宅」詩の「梟鳴松桂枝、狐藏蘭菊叢」を指摘している。戸谷氏は前掲論文において、『徒然草』第二百三十五段の典拠としては、その表現の近似性から言えばまず蓬生巻の記事を挙げるべきであるが、二百三十五段の主題となっている「家」と「心」の関係から見ると、夕顔巻の記述の方がより近いのではないかと述べられ、さらに「兼好の心にまず「凶宅」があったにせよ、「凶宅」と夕顔と蓬生の三者が、三様の角度から兼好に影響を及ぼしたということは否定できない」と説かれている。

このように『徒然草』に引用されている『文集』の詩句の中には、

『源氏物語』に採られているものが多いことが注目される。兼好が『源氏物語』を熟読していたことは、『徒然草』第十四段と第十九段の記事の中に『源氏物語』の書名が出てくることから明らかであるし、『源氏物語』中の難義として名高い「揚名介」をめぐる考証を『徒然草』第九十八段に記している事実からも、中世の注釈家の態度に通ずる『源氏』への関心がよく窺われる。また『源氏物語』の風景を思わせるような記事が百四段、百五段、あるいは二百三十五段などに見えること等を勸案しても、兼好が『徒然草』を執筆するに際して、『源氏物語』を座右においていた可能性は否定し難いであろう。

『徒然草』における『文集』の受容には兼好の愛読書である『源氏物語』が媒介になっていた場合が少なくないと考えられるのである。

2 『徒然草』が引く『文集』の詩句が先行の和歌に受容されている場合

次に、『徒然草』に引用されている『文集』の詩句が、先行する和歌の中に受容されている事例について検討してみたい。和歌における『文集』受容には『句題和歌』『文集百首』のように『文集』の詩句をそのまま題にして和歌を詠ずるケースと、句題としては設定されていなくても『文集』の詩句に基づく表現が一首の中に見受けられるケースとがある。まず、後者に相当する事例を幾つか見てみたい。

『徒然草』第三十八段は、人生における名利はすべて空しいという醒めた認識について語る段である。その中の一節「埋もれぬ名を永き

世に残さんこそあらまほしかるべきに、位も高く、やむごとなきをしも勝たる人とやいふべき」の傍線部分については『寿命院抄』以来の諸注が『文集』巻五十一「題故元少尹集後集二首」の「埋骨不埋名」を典拠として挙げている。しかしながら、その一方で、この言葉は平安中期以降の歌人たちの間ではすでに一種の歌語となっており、それを用いた歌も広く詠まれていた。

もるとともに苔の下にも朽ちもせて埋もれぬ名を見るぞ悲しき

(金葉集二度本・巻十・雑下・六二〇・和泉式部^{注19})

わが深く苔の下まで思ひおく埋もれぬ名は君や残さむ

(新勅撰集・巻十七・雑二・一一九二・尊円法師)

埋もれぬ名をだにきかぬ苔の下にいくたび草のおひかはるらん

(続後撰集・巻十八・雑下・一二三六・慈円)

埋もれぬ名のみ残してなき人のいづくにつひの宿定むらん

(続拾遺集・巻十八・雑下・一三二一・法印定円)

埋もれぬ名をだに聞かぬ苔の上にくたび草のおひかはるらむ

(拾玉集・詠百首和歌・二〇〇一・慈円)

苔の下に埋もれぬ名をば残すともはかなの道や敷島の歌

(拾遺愚草・中・一五八三・定家^{注19})

兼好は直接『白氏文集』によって「埋もれぬ名」の語を得たとも考えられるが、これらの歌の表現から影響を受けた可能性も十分に想定できるとはならないだろう。

第五十四段は、仁和寺の法師の話を三段続けて語っている中の第三

話である。「御室のいみじき児」を「いかで誘ひ出でて遊ばむと」企んだ法師が、「風流の破子」を「箱やうの物にした、めん」れて、「双の岡の便よき所に埋み置きて、紅葉を散らしかけ」た後、児を誘って出かける。しかし、法師たちの企ては失敗に終わる。

うれしと思て、こ、かしこ遊びめぐりて、①ありつる苔の筵に並みゐて、「いたうこそ困じにたれ。②あはれ紅葉を焚かむ人もがな。験あらむ僧達、祈心みられよ」など言ひしろひて、埋みつる木の本に向きて数珠押し擦り、印ことくしく結び出でなど「して、いらなく」振舞て、木の葉を掻き退けたれど、つやく物見えず。

結局箱は見つからず、「あまりに興あらむとすることは、かならずあひなきものなり」と結ばれている。傍線を付した①「ありつる苔の筵に並みゐて」の部分について、久保田淳氏は新日本古典文学大系『方丈記・徒然草』の注及び『徒然草評釈』(『国文学』一九八九年五月号、一一六回)において『文集』巻十三「秋雨中贈元九」の「不堪紅葉青苔地」に拠ることを指摘されている。また②「あはれ紅葉を焚かむ人もがな」の部分が巻十四「送王十八歸山寄題仙遊寺」の「林間爰酒繞紅葉、石上題詩掃緑苔」に拠っているということは、『寿命院抄』以来のすべての注釈書で認められている。①の「苔の筵」は苔が一面に生えているさまを筵に見立てて言う語で、和歌によく用いられている。

三芳野之^{ミヨシノノ} 青根我峰之^{アヲネガミネノ} 蘿席^{コケカシロ} 誰將織^{タレカオリケシ} 経緯無^{タテマキナシ} 一^{ヒト}

(万葉集・巻七・雜一・二二四)^{注21}

かすがのあをねがみねの苔筵たれかおりけんたてぬきなしに

(古今和歌六帖・二・一三九〇)

山ふかみ苔の筵の上にて何心なく猿かな

(山家集・下・一二〇一)

やどりするいはねのとこの苔筵幾世になりぬねこそいられね

(千載集・巻十七・雜中・一一〇九・覚忠)

苔筵あをねが峰も見えぬまでもみぢふりしく神無月かな

(夫木抄・巻二十一・雜三・九〇六一・通清)

法のためのべしみ山の苔筵まづ色色の花ぞふりしく

(玉葉集・巻十九・釈教・二六四二・久我内大臣)

万葉の時代から苔が一面に生えているのを「筵」に喩えて詠んでいた
ようであるが、院政期から中世にかけての歌人たちの間でも「苔筵」
は一種の歌語として定着していたと考えてよいであろう。兼好として

もそのような和歌的表現の伝統を踏まえつつ、「苔筵」の語を用いた
と思われる。ところで、前掲の『文集』の詩句「不堪紅葉青苔地」は
続く「又是涼風暮雨天」と対をなし、「林間煖酒繞紅葉、石上題詩掃
緑苔」の句とともに『和漢朗詠集』^{注22}に採られている。『徒然草』五十
四段の本文では、「紅葉」と「苔の筵」とが連続して登場するのであ
るが、この両者を対にするような舞台の設定を兼好が行なった背景に
は『和漢朗詠集』にも収められた『文集』の著名句「不堪紅葉青苔
地、又是涼風暮雨天」及び「林間煖酒繞紅葉、石上題詩掃緑苔」が意

識されていたのではないかと想像されるのである。

また、下巻冒頭の第三百三十七段は、兼好の美意識を表わした長文の
段であるが、「望月のくまなきを千里のほかまで眺めたる」の部分
『文集』巻十四「八月十五日夜禁中獨直對月憶元九」の「三五夜中新
月色、二千里外故人心」を典拠としているという指摘が『壽命院抄』
をはじめとする諸注でなされている。白詩のこの詩句は『和漢朗詠
集』にも採られている著名な詩句である。「千里の外」という表現は
院政期以降の和歌においても広く用いられていたようである。

行く駒の爪の隠れぬ白雪や千里の外にすめる月影

(清輔朝臣集・秋・一二六)

月を見て千里の外を思ふにも心ぞかよふ白川の関

(五社百首・「関」・八九・俊成)

くもきゆる千里の外に空さえて月よりうづむ秋のしらゆき

(秋篠月清集・花月百首・五九・良経)

百三十七段の「千里の外」について三木紀人氏の『徒然草全訳注』
では、「二千里」ならぬ「千里」とあることからすれば、直接には歌
人たちの用語に拠るものである。「千里のほか」は、「二千里外」を和
歌の文脈になじみやすい形に翻案したものであろう」と注を付されて
いる。久保田淳氏も『徒然草評釈』『国文学』一九九七年八月号、二
二七回)において、「兼好は『和漢朗詠集』の詩句に拠りつつ、それ
が同時に和歌的表現としても定着していることを考えた上で用いてい
るのであろう」と解されている。

このように百三十七段の「千里の外」については、まず第一には、先行する和歌における同一表現の事例に注意すべきであると思われるが、これらの和歌における修辭が白詩を典拠として成立したものであるということを踏まえ、併せて満月の光を見て遠くに思いを馳せるという発想の共通性を考慮するならば、「望月のくまなきを千里のほかまで眺めたる」の叙述の根底に『文集』の「三五夜中新月色、二千里外故人心」の詩句があることは間違いないと思われる。

以上述べてきたように、「埋もれぬ名」、「苔筵」、「千里の外」などは、一種の歌語、歌ことばとして歌人たちの間ではすでに定着していたようである。その中でも、「埋もれぬ名」「千里の外」については、和歌にそれらが広く用いられるようになった背景には、白詩の著名句の存在が留意されるのであつて、かかる事情を十分に承知した上で、兼好は『徒然草』の中にこれらの言い回しを取り入れてきたと思われるのである。

次に、『徒然草』に引用された『文集』の詩句が先行する和歌の中で句題として使われている事例について見てみたい。

白詩の詩句を句題として詠ずることは、平安時代から中世の歌壇において広く行なわれていたが、その代表は言うまでもなく『句題和歌』『文集百首』である。『句題和歌』は、古今集時代の儒者であり、歌人でもあつた大江千里の家集である。寛平六年（八九四）宇多天皇に奉呈したもので、白楽天の詩句を題にして詠んだ歌は総歌数一二五首の七四首を占める。^{〔注2〕}一方、『文集百首』は建保六（一二二八）年、

慈円、定家、寂身が『白氏文集』の詩句を歌題にして詠んだ百首である。慈円の勧めに応じて定家が唱和したもので、寂身の作品は四十首のみ現存している。^{〔注24〕}以下、『句題和歌』及び『文集百首』の句題となつている詩句が『徒然草』に受容されている事例について検討してみたい。

第十九段は四季の移り変わりについての随想を述べた段である。

おりふしの移り変わるこそ、物ごとにあはれなれ。「物のあはれは秋こそまされ」と、人ごとに言ふめれど、それもさる物にて、今ひとときは心も浮きたつ物は、春のけしきにこそあめれ。

傍線を付した「物のあはれは秋こそまされ」の部分の出典として、『野槌』と『慰草』『徒然草評釈』（『国文学』一九八三年六月号、四三回）では、『白氏文集』巻十四「暮立」の「大抵四時心惣苦、就中腸断是秋天」を指摘している。この詩句は『千載佳句』『和漢朗詠集』にも採られている著名な詩句であるが、『文集百首』の句題ともなっている。

大抵四時心惣苦、就中腸断是秋天

あだに思ふ憂へは秋の空ながら雲に心やなびき行くらむ

（拾玉集・詠百首和歌・一九三四）

大抵四時心惣苦、就中腸断是秋天

さくら花山郭公雪はあれど思ひをかざる秋はきにけり

（拾遺愚草員外・三三二五）

第三十段は「人のなき跡ばかり悲しきはなし」を書き出しにして、

人の死後、年月を経て段々と消えてゆく悲しさや寂しさを記している段である。この段の「いづれの世の人と、名をだに知らず、年々々の春の草のみぞ」の部分の典拠として『壽命院抄』以来の諸注は「続古詩十首」の「古墓何代人、不知姓與名。化作路傍土、年年春草生」を指摘している。この詩句も『文集百首』の句題に採用されている。

古墓何代人、不知姓與名。化為路傍土、年年春草生
埋もれぬ名をだに聞かぬ苔の上にくたび草のおひかはるらむ

(拾玉集・詠百首和歌・二〇〇一)

古墓何代人

塚ふりてその世も知らぬ春の草さらぬ別と誰したひけん

(拾遺愚草員外・三二九二)

また、春の暮、風雅な家で一人讀書する若い男を垣間見た話を記す第四十三段の「庭に散しほれたる花、見過ぐしがたきを入れて見れば」の部分については『文集』「尋春題諸家園林・又題一絶」の「遙見人家花便入、不論貴賤與親疎」を典拠とするという指摘が『野槌』「慰草」『文段抄』などの近世の注釈書でなされている。この指摘は新日本古典文学大系『方丈記・徒然草』でも継承されているが、この白詩の詩句も『句題和歌』『文集百首』の句題となっている。

遙見人家花便入

よそにても花を哀と見るからにしらぬ宿にぞまづ入りにける

(句題和歌・八四)^(注)

遙見人家花便入 不論貴賤与親疎

花をやどのあるじとたのむ春なれば見にくる友をきらふものかは

(拾玉集・詠百首和歌・一九一四)

遙見人家花便入 不論貴賤与親疎

はるかなる花のあるじの宿とへばゆかりもしらぬのべのわか草

(拾遺愚草員外・三二〇五)

二条派の歌人である兼好にとって『句題和歌』『文集百首』はともにその知識の範囲内にあつたと推測されるが、以上見てきたように、そこで句題として扱われている『文集』の詩句が『徒然草』に受容されている事例も少なくないのである。兼好が『文集』そのものを愛読していたことは疑えないが、和歌の中に受容された『文集』の詩句は歌人兼好にとってやはり一段と馴染み深い存在であつたらうし、実際に文章の中に用いるべき言葉を選択する際には、歌人としての言語感覚を働かせていたものと想像されるのである。

3 『徒然草』に受容されている『文集』の詩句が先行する佳句選に採られている場合

『徒然草』に引用されている『文集』の詩句の中には、『千載佳句』や『和漢朗詠集』に採られているものが少なくない。『千載佳句』は大江維時の漢詩佳句選で、唐代の詩人一五三人の佳句一〇八三首を抜き出し配列したもので、白楽天の詩句は五〇七首、全体の半分を占めている。^(注)一方、藤原公任撰の『和漢朗詠集』に収められている漢詩句のうち中国の詩人の作は計二三四首あるが、その中の一三九首

が白楽天の詩句で、全体の六割近い圧倒的多数を占めている。^{注27} 当時『文集』がいかに流行していたかが窺われる。

表に見られるように、『徒然草』における『文集』の引用が二十例ある中で『千載佳句』と『和漢朗詠集』に採られているものがそれぞれ九例もあり、ほぼ半数を占めている。その中でも第十九段の「大抵四時心摠苦」、四十三段の「遙見人家花便入」、五十四段の「不堪紅葉青苔地」と「林間煖酒繞紅葉」、百三十七段の「三五夜中新月色、二千里外故人心」、百七十四段の「人間榮耀因緣淺、林下幽閑氣味深」、百八十八段の「事事無成身老也」などは『千載佳句』と『和漢朗詠集』両方に採られている。

『徒然草』の『文集』受容には『千載佳句』『和漢朗詠集』等を介して白詩の中でも特に人口に膾炙していた詩句が自ずから取り込まれてきたという側面があることも否定できないであろう。

三

ここまで概観してきたように、『徒然草』に引用されている白楽天の詩句のほとんどは、和歌や物語、或いは『千載佳句』『和漢朗詠集』に代表される佳句選等の先行する日本の古典文学作品の中にその受容例を見出すことが可能である。そして一瞥したところ、川口久雄氏が説かれるごとく、『文集』の詩句を直接受容したか否か疑問視されるケースも少なくないかに感ぜられる。しかしながら、『徒然草』

における『文集』の受容の様相を個別に検討して行くと、単に修辭のレベルに留まらず、詩の主題そのものを発想の源泉としたり、内容や構想の面でごく近似している事例も散見されるのである。詳しくは次稿に譲りたいが、例えば、第七段と「不致仕」、第八段・第九段と「古塚狐」、第三十八段と「勸酒」・「潤底松」・「続古詩十首」、第四十三段と「尋春題諸家園林」、第七十四段・第七十五段と「老来生計」、第二百三十五段と「凶宅」などがそうであって、『文集』そのものに対する知識無くしてはこのような事例は生じて来ないのではないかと考えられるのである。

『文集』は三代集や『伊勢物語』『源氏物語』と並ぶ歌人にとっての必読書であり、『枕草子』に典型的に見られるように王朝人の文学や美意識の規範でもあった。『徒然草』における白詩の受容は、先行の日本古典文学における受容例も視野に入れた上で、やはり『文集』そのものを熟読する過程から生じて来たものであったと推察されるのである。

おわりに

『白氏文集』は、平安時代以来、日本の古典文学に広く受容され、圧倒的な影響力を及ぼした。和歌にも、白詩を踏まえて詠んだ歌が数多くあり、『文集』中の詩句を題にして歌を詠ずる方法も試みられてきた。また『源氏物語』には新樂府をはじめ、さまざまな白詩が多く

の巻にわたって受容されている。そして、その『源氏物語』が中世においては歌人にとって必読書であり、一種の歌書として扱われていたという事実がある。また藤原定家の歌論書である『詠歌大概』『毎月抄』『京極中納言相語』等にも歌人にとっての『白氏文集』の意義の大きさが説かれている。二条派の歌人である兼好は、これらの定家の言説にも十分に通じていたものと思われる。兼好は先行する日本の古典文学に及ぼした『文集』の影響力、規制力の大きさとその受容の様相をよく承知していたと推察されるが、その一方で、定家の教えに沿うような形で『文集』そのものをも熟読していたと想像される。そして、その両面からの『文集』体験に促されるような形で、『徒然草』の中に『文集』の詩句を積極的に取り入れて行ったと考えられるのである。

注

- (1) 『徒然草』の本文は、正徹本を底本とする久保田淳校注の『方丈記・徒然草』（新日本古典文学大系 岩波書店 一九八九年一月）に拠った。同書では正徹本の欠字、欠文を他本によって補った箇所には「」が付されているが、その「」はそのまま付した。ただし、漢字・送り仮名の当て方などについては適宜表記を改めた場合がある。また桑原博史『徒然草研究序説』（明治書院 一九七六年二月）に拠って烏丸本、常縁本の本文を参照し、必要に応じて言及した。

- (2) 山岸徳平編『日本漢文学史論考』（岩波書店 一九七四年十一月）。
- (3) 『学苑』一九七四年一月号。
- (4) 市古貞次編『諸説一覽徒然草』（明治書院 一九七〇年二月）。
- (5) 『徒然草講座』第四卷（有精堂 一九七四年十月）。
- (6) 『白氏文集』の本文、詩番号は那波本を底本とする平岡武夫・今井清編『白氏文集歌詩索引』（同朋舎 一九八九年十月）に拠った。白詩の訓読文については、佐久節『白楽天全詩集』全四卷（一九二八年八月）—一九三〇年八月、本稿では日本図書センターの復刻本を利用した。と、新釈漢文大系『白氏文集』三、四（明治書院、一九八八年七月、一九九〇年十一月）を参照して付した。
- (7) 秦宗巴『つれく／＼草寿命院抄』、林道春『野槿』、松永貞徳『慰草』の本論文における引用は、初刻本を底本とする吉沢真人『徒然草古注釈集成』（勉誠社 一九九六年二月）に拠った。
- (8) 安良岡康作『徒然草全注釈』上下（角川書店 一九六七年十二月、一九六八年五月）。
- (9) 北村季吟『徒然草文段抄』。本論文における引用は『徒然草古注釈集成』（日本図書センター 一九七八年十一月）所収の『校正徒然草文段抄』に拠った。
- (10) 三谷栄一・峯村文人編『徒然草解釈大成』（岩崎書店 一九六六年六月）。
- (11) 『源氏物語』の本文の引用は、新編日本古典文学全集本（小学館）に拠った。源氏物語の古注釈書は、『紫明抄』『河海抄』『花鳥余情』『細流

抄』『岷江入楚』『湖月抄』等を参照した。

(12) 『伊勢物語』の本文は、新編日本古典文学全集本(小学館)に拠った。

(13) 近藤春雄『白氏文集と国文学 新楽府・秦中吟の研究』(明治書院 一九九〇年十一月)。

(14) 『和漢朗詠集』の本文と詩歌番号は、大曾根章介・堀内秀晃校注『和漢朗詠集』(新潮社 一九八三年九月)に拠った。

(15) 『国語と国文学』一九七六年六月号。

(16) 三木紀人『徒然草全訳注』(一)四、講談社学術文庫、一九七九年九月
〜一九八二年六月)。

(17) 田辺爵『徒然草諸注集成』(右文書店 一九六二年五月)。

(18) 本論文における和歌の本文の引用と歌番号は特に断わらない限り『新編国歌大観』に拠った。

(19) 藤原定家の和歌の本文と歌番号は、久保田淳『訳注藤原定家全歌集』
上下(河出書房新社 一九八五年三月、一九八六年六月)に拠った。

(20) 久保田淳『徒然草評釈』(『国文学解釈と教材の研究』学燈社 一九七八年五月号より連載中)。

(21) 『万葉集』の本文の引用は『新編国歌大観』に拠り、同書に付す西本願寺本の訓を付した。歌番号は旧国歌大観番号を用いた。

(22) 『不堪紅葉…』は『和漢朗詠集』卷上『紅葉』(三〇一)に、「林間緩酒…」は卷上『秋興』(二二二)に収められている。

(23) 『日本古典文学大辞典』(岩波書店、一九八三年十月〜一九八五年二

月)。

(24) 石川一「慈円と白居易」(『白居易研究講座』第三卷、勉誠社、一九九三年十月)。

(25) 『千載佳句』の本文と歌番号は、金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集句題和歌・千載佳句研究篇』(培風館 一九四三年十二月)に拠った。

『句題和歌』の本文は、同書所収の宮内省図書寮御本を用い、歌番号については、『新編国歌大観』に拠った。

(26) 注(23)に同じ。

(27) 注(23)に同じ。